

幸手宿



幸手宿のなりたち

日光道の整備前から、幸手は利根川水系による河川舟運と、鎌倉街道中道の人の往来で、交通の要衝として栄えていました。特に中世では、古河公方の重臣・幸手一色氏との縁が深く、政治的・軍事的にも重要な場所であったことが分かっています。

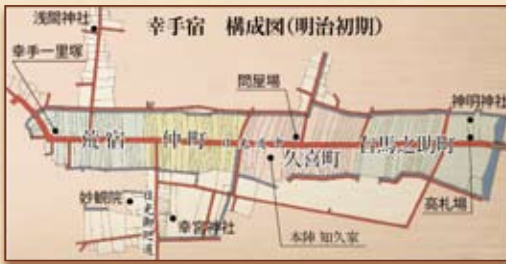
江戸時代に入り、日光道が整備されると、一六一六（元和二）年に、幕府より人馬継立を命ぜられ『幸手宿』となりました。

幸手宿は、日光道のみならず、將軍家による日光社参の道である日光御成道との結節点でもあることから重要な地であったと考えられています。

幸手宿の構成

宿駅としての幸手宿は、南から右馬之助町、久喜町、仲町、荒宿の4ヶ町より構成されていました。


一八四三（天保十四）年の「日光道中宿村大概帳」には、幸手宿の長さ585間（9町45間）、道幅6間、家数962軒、人数3937人、本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠27軒とあり、城下町に併設された宿を除くと、千住宿、越ヶ谷宿に次ぐ日光道3番目の規模を誇っていました。




日光道中間延絵図（東京国立博物館所蔵）




H 旅館「朝萬」
あさよろず
1819（文政2）年創業の老舗旅館。館内に明治末の要人の宿札が残る。
▶明治32年改築当時3階建ては珍し




きしもと 岸本家住宅主屋
かつて醤油醸造業を営み、1900（明治33）年パリ万博で銅賞を受賞。現在は主屋を残すのみとなったが、古民家カフェやイベントなどに活用されている（国登録有形文化財）。



ほんじん 本陣跡
幸手宿の本陣は知久家が務め、1876（明治9）年の明治天皇行在所ともなった。



さちみや 幸宮神社
創建より400年以上の歴史を持ち、1914（大正3）年の合祀を機に幸手町の総鎮守となる。
▶見事な本陣彫刻（市指定文化財）





まちあるきマップ

市の主要な観光資源である権現堂堤と駅とを結ぶ動線上にある日光街道幸手宿の歴史的・文化的資源を紹介した幸手宿まちあるきマップでも幸手宿の紹介をしています。



日光街道とは

日光街道は、江戸幕府によって整備された五街道のひとつで、江戸期には日光道中または日光道と呼ばれていました。江戸日本橋を起点とし、日光坊中（日光東照宮）まで達し、総延長は36里3町2間（約142km）に及びます。日光街道は、日本橋から宇都宮宿まで奥州道との共用区間であったため、東北方面の大名の参勤交代のほか、日光社参（東照大権現への参拜）の道として、庶民にも多く利用されていました。日光街道には21の宿場が設けられ、人馬の継立、助郷差配等の業務を行う問屋場、大名が宿泊・休憩をした本陣、脇本陣などが置かれたほか、旅籠、木賃、茶屋や商店が建ち並び、町場を形成し賑わいを見せていました。

幸手一里塚

日本橋から12里（約47km）の一里塚跡。街道の両脇に築かれ、榎が植えられていた。

日光御廻道

にっこうおまわりみち
將軍家日光社参の際の水害の難を回避するため整備された迂回路で、一度も使われなかった幻の日光社参路。いまは「妙観横町」と呼ばれ、妙観院の境内に道標が残されている。



日光道中幸手（埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵）

香水山 正福寺(なかぞね)

正福寺には僧侶の修学機関である「談林所」が置かれ、多くの修行僧を教育した。真言宗。また「徳川実紀」には、將軍に就任する以前で数え年9才の四代將軍家綱が、1649（慶安4）年の日光社参の折、この正福寺に宿泊したことが記されている。

日光道中道標

境内にある大きな道標。権現堂河岸と日光道中への道標となっている。

善提山 聖福寺(しんてら)

將軍家の休憩所と伝わる。浄土宗。本堂の「將軍の間」の彫刻は、かの日光東照宮「眠り猫」を作った彫工・左甚五郎の作と伝わるほか、運慶作と伝わる阿弥陀如来、幸手の彫工・後藤義光（または義雄）作といわれる鐘楼堂の彫刻などがある。山門は唐破風の四脚門で、勅使門と呼ばれる（市指定文化財）。

芭蕉の句碑

1693（元禄6）年、深川芭蕉庵での十三夜連句会で、松尾芭蕉は奥州への旅路を思い起こし「幸手を行けば栗橋の関」（上の句は「きり麦をはや朝かげにうち立てて」と）と詠んだ。なおその時に弟子の曾良が詠んだ句は「松杉をはさみ揃ゆる寺の門」で、聖福寺の勅使門を詠んだとされる。